

珍しい純文学的考察 これぞ学問

今日の日本が直面している憲法、安全保障、教育をはじめとする国家的課題に取り組み、日本再生に向けた活動を行っている民間シンクタンクの公益財団法人「国家基本問題研究所」（櫻井よしこ理事長）が、外国人による優れた日本研究を顕彰、奨励する第5回「国基研 日本研究賞」の受賞者2氏を選出した。



櫻井よしこ
理事長



田久保忠衛
副理事長

最高賞の「日本研究賞」には、英国出身の中央大学商学部教授（言語学）、ロバート・モートン氏（52）を選んだ。「日本研究特別賞」には、韓国出身の文化人類学者で東亜大学東アジア文化研究所所長、広島大学名誉教授の崔吉城氏（77）が選ばれた。

「日本研究賞」は、日本文明を誇りとし、広い国際的視野に立って日本の在り方を再考する国基研の活動に共鳴する寺田真理氏からの寄付を元に平成26年に創設された。対象となるのは、日本に帰化した1世を含む外国人研究者で、政治、経済、安全保障、社会、歴史、文化の各分野で日本に対する理解を増進する研究

に対し、今年には日本研究賞に1万ポンド、特別賞に5千ポンドが贈られる。近年に刊行、発表された日本語が英語による作品から選出される。国基研の櫻井理事長は日本研究賞のモートン氏について「珍しい切り口で日本の近代化を捉えた、素晴らしい研究」と評価し、田久保忠衛副理事長は「日本をどのような角度から深く研究したかが評価される賞において、モートン氏のような純文学的考察は非常に珍しい。明治維新期を日本で過ごした英国人外交官が何を考え、どのように感じていたのか、父親へ宛てた手紙という特殊な視点に注目してまとめている、これぞ学問的研究と呼べる作品」とたたえた。

記念講演会は7月4日、東京都千代田区のイノホールで開かれる。

- 選考委員
櫻井よしこ・国家基本問題研究所理事長（委員長）
田久保忠衛・国基研副理事長、杏林大学名誉教授（副委員長）
伊藤隆・東京大学名誉教授
平川祐弘・東京大学名誉教授
渡辺利夫・拓殖大学学事顧問
高池勝彦・国基研副理事長、弁護士

来月4日 モートン氏記念講演会

日時 2018年7月4日(水)
午後3～5時(開場2時)
場所 イノホール(東京都千代田区千代田1-1-1 飯野ビル4F)
会費 3000円(一般)、1000円(国基研会員)
※当日会場でのお申し込みはできません

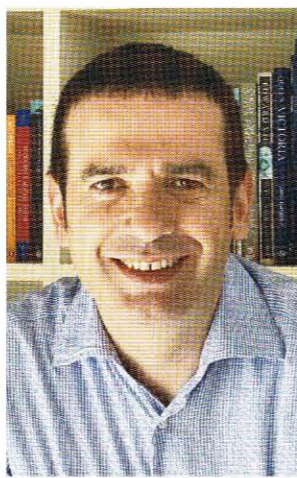
申し込み方法
【記念講演会参加希望】と明記の上、氏名(国基研会員は会員番号も記入)、郵便番号、住所、電話番号を記載し、はがきもしくはFAXでお申し込みください。参加券を発送いたします。定員(450人)に達し次第、締め切ります。

申込期限 6月22日(金)必着
〒102-0093 東京都千代田区千代田2-2-6の1
平河町ビル5階
公益財団法人 国家基本問題研究所 S係
FAX 03・3222・7821
URL http://jinf.jp

日本研究賞

ロバート・モートン氏は、平成12年から中央大学で教壇に立ち、言語学、音声学などの授業を担当する傍ら、日本アジア協会の理事を務めている。19世紀の英国史や、日英関係についての研究を中心に、日本についての多くの著作がある。

今回、受賞対象となった「ミットフォードと日本における近代国家の誕生」(ルネッサンスブックス、2017年、邦訳なし)では、英国貴族出身の外交官であるアルジャーノン・バートラム・フリーマン・ミットフォードの日本の日々について、彼が父親に宛てた手紙、ともに過ごした外交官仲間や日本で出会った將軍、藩士、政治家らさまざまな人物との



中央大学商学部教授 ロバート・モートン氏

関わりを通して、国内でどのような動きがあり、彼が持つ日本へのイメージがどのように変化したのか鮮やかに描かれている。明治維新期に関する書籍は非常に多く、その捉え方もさまざまだが、この本は日本の近代化を真正面から考察するのではなく、あるいはミットフォード自身がいかにか貢献したのかに着目するでもなく、彼の率直な感情から日本の変化を感じ取るという手法が非常に珍しく、新しい。彼とともに駐日英国公使館で勤務したハリ・パ

1965年、英国生まれ。英国のサセックス大学で歴史学学士、同ヨーク大学で応用言語学修士、さらにオーストラリアのクイーンズランド大学文芸創作課程で博士号を取得。97年から慶應義塾大学商学部講師、2000年からは中央大学で教鞭(きょうべん)をとり、09年から商学部教授。日本アジア協会誌「The Transactions of the Asiatic Society of Japan」の編集長を01年から続け、10年から11年まで同協会会長も務めた。アーネスト・サトウの専門家であるイアン・ラックストーンと共著『アーネスト・サトウ日記1861—1869年』(ユーリカプレス、2013年)を出版。

維新期の変化 鮮やかに

ークスやアーネスト・サトウのほうがかはるかに著名であるが、この本ではバイプレーヤーとして登場しているのも新鮮だ。ミットフォードは1866年10月に到着した横浜の地で、日本での勤務を開始した。まもなく横浜で火事があり、彼は江戸に移り住む。そこは歌川広重が描いたような美しい場所ではなかったが、ミットフォードは次第に愛着を感じ始めるのである。

と振り返る。ミットフォードはこの後、西洋人として初めて天皇に謁見、切腹を目撃するなど、日本の歴史上最も重要な場面に遭遇できたことを誇りにしていた。大坂に残り、明治新政府との諸交渉に1人であった彼は、攘夷行動を禁止する法令発布や隠れキリシタンの弾圧抑止を実現させ、日本の近代化をさらに進めたのだ。

も深く感謝しております。私の著作が明治維新から150周年記念の今年、2018年に受賞したことに格別の喜びを感じています。明治維新期に日本に駐在したA・B・ミットフォードという英国人外交官を中心人物として扱っていますが、彼は素晴らしい機会に恵まれました。將軍を含めほとんどの人が御簾の奥の天皇にしか語りかけることができなかった時代に、まだ10代だった明治天皇と向き合っていた機会がありました。

っており、彼の日本に対する愛憎関係の揺れが本書では如実に浮かび上がる。史伝は網羅的で、彼の晩年からミットフォードの子孫までをもたどっている。評伝を読むことで、私たちは同時代の英国の上流社会や外交についても実に多くのことを教えられた。西洋至上主義的ないしはキリスト教至上主義的な視点から脱却した指摘も鋭い。個人を通して見た日英関係を鮮やかに描いた人文主義的アプローチの史伝といえる。

特別賞

崔吉城氏は、国家も戦争を通じて性を考察することを研究テーマの一つに据えてきた。「戦争と性」に対する自身の考え方の原点には1950年に勃発した朝鮮戦争での体験を挙げる。

軍事境界線近くへの故郷では当時、婦女暴行が凄惨を極めたという。貞操観念の強い儒教的な倫理観が深く根付く土地柄だったが、住民は性暴力の恐怖から、防衛手段として売春婦を認めざるを得なかったとする。

東亜大学東アジア文化研究所所長 広島大学名誉教授 崔吉城氏

受賞対象の『朝鮮出身の帳場人が見た慰安婦の真実 文化人類学者が読み解く「慰安所日記」』(ハート出版、2017年)は、こうした研究と「対」になる存在だと位置づける。本書は、先の大戦中にビルマ(現ミャンマー)とシンガポールの慰安所で帳場の仕事をしていた朝鮮人男性が書いた日記2年分(1943～44年分)を丹念に精査したものだ。現地へ赴いて男性

の足跡をたどるほか、元慰安婦の証言との比較も行っている。日記について、韓国では「日本軍による朝鮮人女性の強制動員の決定的資料だ」と認識されているという。これに対し、崔氏は「慰安婦の募集の過程が書かれておらず、強制連行、軍が業者に強制して連れて行った、などということには、一切触れていない」「本日記で見える限り、慰安婦ないし売春

り、売春業の出稼ぎであった」との見方を示す。日韓関係で韓国は慰安婦を「政治的カード」にしている、と指摘する崔氏。背景として「日本に比べて韓国では、より貞操を強調する社会である」ことを挙げ、「韓国の、儒教的な貞操観を利用して政治的に煽られている状況にも、注意を喚起したい」と促す。その上で、本書を母国への痛烈な直言

で結んでいる。「韓国が、セックスや貞操への倫理から相手方を非難することは、韓国自身のことを語ることに繋がっている。つまり、それを詳しく論じることは、いつか必ず本人に戻るブーメランのようなものなのである。たたちに中止すべきである」と

ており、韓国語訳本とは内容が多少異なることである。本書は、崔吉城氏が原文を読み解き、文化人類学者としてさらに日記の著者の勤務先を訪ねて、分析したものである。第二次大戦中の日本軍の慰安婦とは何かについて、政治的論争が続いているが、論争よりも慰安婦の実情を知ることがもっと重要である。本書は、極めて客観的で公平な分析が行われている。

「戦争と性」 痛烈な直言

婦は、強制連行されてきたとは言えない」と異を唱える。

で結んでいる。

ら嫌われ、非難されることが多いのです。



東亜大学東アジア文化研究所所長 広島大学名誉教授 崔吉城氏

1940年、韓国生まれ。韓国・ソウル大学師範学部卒業、同・高麗大学大学院国文学専攻修了。韓国陸軍士官学校教官などを経て、72年に日本へ留学。85年、筑波大学で文学博士号を取得。99年、日本に帰化。現在、東亜大学教授、同大学東アジア文化研究所所長、広島大学名誉教授。

著書に『親日と反日の文化人類学』(明石書店)、『韓国の米軍慰安婦はなぜ生まれたのか 「中立派」文化人類学者による告発と弁明』(ハート出版)など。

から、「慰安婦から見る慰安業は、営業、商売であった。つまり

感謝します。

《講評》高池勝彦・国基研副理事長
2000年頃、韓国の私設博物館の館長が古書店を通じ、慰安所の帳場人をしてきた人の膨大な日記を購入した。13年8月、この日記を安秉直(アン・ピョンジク)ソウル大学名誉教授が韓国語に翻訳して出版。同年、その韓国語訳文からの日本語訳がインターネット上に掲載された。日記は、ハングルと漢字のほかに、片仮名や平仮名が入り交じって書かれ